「第７回 日本女性学習財団 未来大賞」全体講評

2017 年度に、それまでの日本女性学習財団賞から、「日本女性学習財団 未来大賞」に衣替えし、今年度で７回目のレポート募集となりました。

今回の応募者は個人 26 件とグループ 1 件でした。個人は 10 代から 80 代まで幅広い年齢層の方がおいででしたが、40～60 代の方が多く、30 代以下が少なかったのは、少し残念でした。応募者の居住地は、北海道から熊本県まで 15 都道府県にまたがっており、これまで応募のなかった 2 県から初めての応募がありました。今後もさらに全国各地からの応募を期待しています。

これらのなかから厳正な審査の結果、大賞には、長安めぐみさんの「『ひと言』が背中をそっと支える～出会いと学びをめぐって～」が選ばれました。養護学校、男女共同参画センターとその延長での配偶者暴力相談支援センターなどでの勤務や、市民活動としてのデートＤＶ防止プロジェクトへの参加、２度にわたる大学や大学院での学び直しなどの人生を振り返りつつ、そこで出会った人たちや、人生の岐路に立ったときに聞いた誰かの何気ない「ひと言」、メディアを通じて知った先人たちの言葉を受け止め、また背中をそっと支えられてきたことを綴った作品です。

さまざまな「ひと言」に背中を押されて積み重ねてきた自身の人生と、その時々の女性たちをめぐる国の施策を含む社会状況や問題点を、実態データなども織り交ぜつつ作品をうまく構成しており、文章の完成度も高いと評価されました。

今回の応募作品は、同じようなレベルの高さのものが多く、選考に苦慮しましたが、結果として、最終選考には大賞受賞作のほかに 2 点が残りました。ともに、性暴力に関わる内容です。

１つは、地域でのフラワーデモを手探りで立ち上げ、展開してきた活動を、過去からの女性たちの運動の中に位置づけ、その経緯と自身の思いを率直に語り、そして刑法改正を受けて一旦休止したのちに次の活動を始めていることを報告しています。選考委員会では、歴史も踏まえつつ、フラワーデモに参画した経緯やご自身の思いを率直に書かれている点が好印象であると意見がでました。

もう１つの作品は、DV 被害からの再起のため、大学院で研究され、いまはその成果をもとに啓発や政策提言を行う団体の代表として新たな一歩を踏み出している過程をまとめたものです。選考委員からは、DV 当事者と研究者の視点を生かしている点で評価できるとの意見がありました。

このほか、就労支援や子育て支援をめぐっての出発・再出発、学校でのジェンダー平等教育の実践、政治分野での女性の参画を応援する活動などについても読みごたえのある作品が多々ありました。海外での生活経験を踏まえて日本の現状に対する提言を書かれていたり、年代の違う 2 人の女性によって書かれた作品、あるいは今後の展開を知りたいと思う魅力的な内容の作品などもありました。

なお、今回はこれまでに応募された方が再応募してくださった作品が多いことが目立ちました。以前の講評などを参照され、ブラッシュアップのあとが見え、最終段階まで選考の対象として議論した作品もありました。今後も、さらに応募、再応募してくださることを期待しています。

「第７回 日本女性学習財団 未来大賞」選考委員会